

御旅所への神幸 浜下りの神事―いわき地方を中心に―

* 佐々木 長生

一. はじめに 問題の所在

福島県太平洋沿岸の浜通り地方には、神輿が海浜に下り、潮垢離を取る浜下りの神事が数多く行われてきており、現在も数社が古式を残した形で継承されている。二〇一一年の東日本大震災により海浜には防潮堤の建設など海浜の景観は一変し、かつての浜下りの神事の祭場も消滅したり、海岸部にあった社殿も流失したり、また浜下りの神事を記載した行列帳や神楽の資料等も流失するという状況にある。

このような状況でも数社では規模は縮小されつつわずかに行われている。令和四年三月には南相馬市鹿島区北海老の虚空蔵尊の浜下りなどは、その一例である。

福島県立博物館では、平成五年から九年までテーマ研究「福島県における浜下りの研究」による調査研究を行っている。その成果は『福島県における浜下りの研究』に報告されている¹⁾。東日本大震災前の浜下りの神事の実態、主に昭和四十年代から五十年代にかけての報告である。

また、福島県浜通り地方の浜下りの神事は、文化庁より記録選択行事に認定され、福島県教育委員会の主導のもと、現在の浜下りの神事の総合的な調査が開始されている。調査は県内の民俗研究者により組織された、調査員が祭礼ごとに調査を担当しているという。浜下りの神事の総合的な調査研究であり、隣接する茨城県や宮城県の浜下りの神事との関連なども明らかになるものと期待される。

筆者は、大学の卒業論文で福島県浜通り地方の浜下りの神事をテーマに、その分布調査を主として昭和四五〜四七年の三年間、当時行われていた浜下りの神事の現地調査と、廃絶していた浜下りについては聞き書きによる調査を行った。その結果、一二〇余りの浜下りの神事の分布を確認することができた。この分布は全国的に見ても突出するもので、茨城県と宮城県沿岸にも

連なつて分布することが確認できた。当時学生の身であった筆者にとり、ただただ浜下りの神事の分布を追いかけるのみで、考察にまでは充分及ばなかった。この時から五〇年余りを経た現在、稚拙な調査であったが、その時の古老たちの伝承や、浜下りの神事の写真は、今となっては得難いものであると自認している。

福島県浜通り地方の浜下りの神事の総合調査研究が行われている折、筆者の拙い調査記録が、その一助となれば、幸甚である。

筆者は出身地の相馬地方の浜下りの神事について、四月八日の八龍神の浜下りについて別稿で概説した²⁾。本稿はいわき地方の浜下りの神事について、神事形態から祭場である御旅所への浜下りという視点に立ち、いわき地方の浜下りの神事で特色的にみられるサカムカエに注目し、五〇年前の調査資料を整理し、相馬地方の浜下りの神事と照合しつつ、福島県浜通り地方の浜下りの神事について民俗学的な考察を加えることも目的の一つとする。研究方法として、筆者自身の調査資料を中心とするが、先学の研究業績および市町村史民俗編等に収録された浜下りの神事の資料を多く利用し、筆者の拙い調査を補っていることをおことわりしておく。また、考察にあたっては、いわき地方を中心とするが、関連資料として福島県内の資料をも紹介し、福島県浜通り地方の浜下りの神事の総括をも試みたい。

二. いわき地方の浜下りの神事

(一) 浜下り

神(神輿・御神体)や人が浜まで下つて潮水をあびる神事や行事で「ハマクダリ」ともいう。浜下りは村落規模の集団による祭礼と、個人による行事とに分けられる。祭礼としての浜下りは、神奈川県から岩手県にかけての太平洋沿岸に分布し、特に千葉・茨城・福島・宮城の四県に多い。茨城県北部

*元福島県立博物館

から福島県南部のいわき地方にかけては、四月八日を祭日にしており、毎年行われる。一方北部の相馬地方では二年に一度など決まった年に行われる。浜下りをする海浜は、聖地としての観念が強い。神奈川県茅ヶ崎市やいわき市などでは、数基の神輿が一つの祭場に下りる寄合祭が行われる。浜下りの神事は獅子神楽や手踊りなど多くの民俗芸能が神々とともに浜まで下り、祭場で奉納される。

浜下りをする神々には漂着神伝承を伴っているものが多く、かつて神が漂着したと伝える浜に下る場合が多い。神々が浜まで下ると、砂や玉石で祭壇を築き、神輿を安置する場合が多い。神輿をかついだまま海水に入ったり、御神体を海水に浸したり、新しい桶に潮水を汲んで神輿に奉納したりする。また桶で御神体や神輿に潮水をかけたりする。これは神々の禊といえる。潮水の浄祓力によって神々が蘇生するという意味もあつたとみられる。

浜下りのときには、祭礼に参加する人のみならず、家族そろって海浜に下り、神輿の周辺で食事をする風習が見られる。神々との共同飲食の習俗ともいえる。相馬地方のように一二年に一度の浜下りでは、親戚知人を家に招いて馳走する習俗が近年まで見られた。筆者も子どもの頃、父母に連れられ行つた記憶がある。

個人による浜下りは、九州地方や沖縄地方に見られる。鳥や小動物が屋内に入り込んだ時など、それを不吉の前兆として、浜下りを行つて身を清めるという。

(2) いわき地方の浜下りの神事の特徴

いわき地方と言えば、一般的にはいわき市を指すが、本稿では双葉郡南部の富岡町・楡葉町・広野町を含めて、「いわき地方」と位置付けて、浜下りの神事の資料を整理することにした。この地域の浜下りの神事は、四月八日が多いことや、神社から祭場となる浜まで数か所の御旅所が設けられるなど共通した神事形態が見られる。双葉町や浪江町など北部や相馬地方とは明確な神事形態が見られることから、浜下りの神事の地域性が存在する。

いわき地方の浜下りの神事の特徴として次の諸点を指摘することができよう。①福島県浜通り地方に一二〇年余りの浜下りが確認されるなか、その半数がいわき地方に分布していること。②祭日は四月八日がほとんどで毎年行われる。③浜下りをする祭場の浜は一定しており、そこに各地から数基の神輿が集合し、④寄合祭りが行われ、海に向かって神輿が安置され、⑤そこで謡やめでたい唄が歌われ、神人共同の飲食を行う。これをサカムカエと呼ん

でいる。⑥浜下りをする神々には、漂着神伝承があり、神上陸の伝承を伝える浜に下る場合が多い。また、⑦浜下りをする神輿と共に、特定の家の氏神も浜下りをする。⑧山宮と里宮として二つの神々の浜下りもみられる。また浜下りの神事の中に、⑨作占的な神事や行事がある。⑩神社から祭場となる海浜までは御旅所が数か所設けられ、神輿が休まれ、そこでも謡や芸能が奉納される。祭場や御旅所では、サカムカエがさかんに行われる。⑪勅使とか殿様・家老と呼ばれる男児の浜下りがある。いわゆるヒトツモノの浜下りが存在する。児童らが馬上で眠ると、神がついたと沿道の人たちは手を合わせ拝む。⑫浜下りが行われる四月八日には、浜下りが行われる沿道の各戸の玄関口や門前には、御神灯の行灯が灯され、その前には山からヤマブキやツジの花を桶に入れ供える習俗が昭和四十年代まで見られた。これをサカムカエとも呼んでいる。里の村の青年たちと浜の青年たちが連携して浜下りの神事が執行され、神輿の受け渡しに厳格に行われる。時には喧嘩騒ぎにもなる。

(3) いわき地方の浜下りの神事の歴史的資料

菅波の大國魂神社には天保三年(一八三〇)の大國神社の豊間浜への浜下りに際して、神輿の受け取り渡しをめぐって豊間村の若い衆と薄磯村の若い衆とが口論となり喧嘩騒動にまで発展し、その処置を記載した天保三年(一八三〇)の文書がある。大國魂神社宮司山名隆弘氏の御提供により、紹介させていただきます。近世のいわき地方の浜下りの神事の様子がうかがえる貴重な資料といえよう。

奉願上候口上之覚

一大國魂大明神神事之儀例年

四月八日内藤因幡守様御領分

豊間村江神幸仕来候處去々寅ノ

四月八日右豊間若キ者ノ

御領分薄磯村若キ者共与神輿

肩入之儀二付口論之上怪我人等も出

来仕既御掛ケ合ニも相成候処荒田目村

名主源左衛門下大越村久右衛門藤間村名主

定右衛門半之丞北白土村大橋庄左衛門菅波村

箱崎庄助沼之内村名主庄五郎右七人

之者共内済取扱事済二茂可相成

処為取替一札一条二付破談二相成去

卯ノ四月中之事済候迄者神幸

見合候様被 仰付當年迄式ヶ年

内神事取行イ罷在候処此度前

書七人之者共外ニ薄磯村市郎治取咥

ヲ以豊間薄磯両村之面々昨十二日

沼之内村名主庄五郎宅江集り別紙

被取替證文之通内事ニ相済候然ル

処此節疫癘瘡流行仕候二付

来ル十五日豊間村迄神幸致呉候

様両村之者共願之趣右扱人より相

願候間事済ニ相成候義ニ御座候得ハ

任其意神幸仕度奉願上候右願

之通被 仰付被下置候様奉願

上候以上

菅波村 天保三壬辰年六月 山名伊豆正

寺社

御役所

（令和四年六月一〇日 小野一雄氏解説）

この史料には、疫病の瘡瘡が海浜の薄磯村に流行したので大國魂神社の浜下り神幸を請願したことが記載されている。浜下りの神事に疫病祓いの信仰観念があったことを示している。海浜の村に漁業不振や疫病流行などに里村の神社に浜下りを要請したことは、古老たちの伝承からも聞かれた。

（4）明治期のいわき地方の浜下りの神事

明治時代のいわき地方の浜下りの神事の様子を伝える資料として、大須賀筠軒の明治二五年記載の『磐城誌料歳時記』がある。これは大國魂神社の浜下りの存在を記述している。

大國魂神社はいわき地方では古い歴史の神社であり、浜下りを行っていることを特記している⁵⁾。

四月

八日 各處神社例祭多シ。先ヅ式内神社ヲ揚ゲ、次ニ式外古社ヲ挙ゲシ。

大國魂明神 城東一里六町、菅波村ニアリ。大物主神ヲ祀ル。神輿豊間浜へ行幸アリ。（以下省略）

三、民俗学におけるいわき地方の浜下りの神事

（1）磐城民俗研究会による調査

高木誠一・山口弥一郎・岩崎敏夫・和田文夫氏の諸氏は、昭和十一年、現在のいわき市平薄磯地区の民俗調査を行っている。その成果は、「磐城豊間村薄磯の漁村民俗資料」として発表されている。この中に、「さかむかり」（さかむかえの誤記か）・「浜下り」・「おしほとりとさかむかへ」が記載されている。この調査報告は、その後柳田国男の目にも触れ、「神道と民俗学」などにも引用紹介される。浜下りの神事の民俗学研究の先駆けとなる調査報告といっても過言ではない。

この調査では、いわき地方の浜下りの神事の分布も記載しており、その主な神社の浜下りの祭場と神事の様子なども報告されている。特に「おしほとりとさかむかへ」の記述は、百年前のいわき地方の浜下りの神事の様子を如実に記載されている資料といえよう。

また、「浜下り」についても、「一定の日に各神社の神輿が浜におさがりになつて潮をとりさかむかへを行ふ事は古より名高い。」と、いわき地方の浜下りの神事の特徴を位置付けている。

サカムカエという呼称は、現在もいわき地方の浜下りの神事で聞かれるが、その詳細は忘れ去られようとしている。この調査では当時の古老からの聞き書きを記載しており、「さかむかへ」の様子を具体的に知ることができるといえる。

各所で潮をとつた神輿は薄磯の浜に集つて海に面して並ぶ。てんまを台として到着順に並び、また同じ順におさかむかへの祝をするのであるが、全部の神輿が並ぶのは堂々として立派である。さかむかへの世話は、薄磯の社総代達が主となって取り行ふのであつて、当日は多忙である。青年漁師みな出て供物を供へる。

さかむかへには先づ高砂、庭のいさどの如きめでたき謡を三つうたふ。こゝの区長とか社総代が代表して発声する。次にめでたを三つうたふ。此方で一つやれば向ふでやるといった具合に両方でやるのである。それがすむと酒盛となる。夕刻神輿は皆帰路につき、この村の青年達は村はづれまで送る。

ことを習慣とする。よその神輿は帰ってもこの薄井神社のは町をもみ歩き社にもどるのは、夜中の十二時頃になったりすることもあるといふ。以上は主として同地の政井氏の話されたところに依る。

この調査報告は、以来柳田国男監修、日本民俗学研究所編の『民俗学辞典』の「御旅所」の項目などにも紹介され、民俗学における浜下り研究の歴史的資料として多くの研究者の目にふれることになる。堀一郎氏の「神幸浜下の神事」などはその一例である。

四 いわき地方の浜下りの神事の特徴

(1) 祭日

いわき地方の浜下りの神事は四月八日に毎年行われることであり、この日は「神の日」とも呼ばれ、田畑に出ることを忌む習俗があった。この日は山からツツジやヤマブキの花を採ってきて玄関や門口に飾る習俗があり、これをサカムカエとも呼ぶ。四月八日の浜下りはいわき地方広範囲に及ぶ。戦後は五月四日に行う神社が多くなった。

(2) 祭場

一定の浜に下り、数基の神輿が下り、寄合祭の形態をとる。サカムカエが行われる。祭場は御旅所としての観念がある。

(3) 漂着神伝承

かつて神が上陸した浜に下る神々が多い。

(4) 御旅所

祭場までの途中に「御旅所」が数か所設けられ、謡や芸能が奉納される。

(5) 作占の行事を伴う

浜下りを行った後や途中で農作物の出来具合を占う行事がある。

(6) 氏神の浜下り

鎮守の神輿と一緒に個人宅の氏神の浜下りを行う。

(7) サカムカエ

神輿のまわりで共同飲食が行われる。

(8) 山宮と里宮の浜下り

山宮と里宮的な観念がみられる二神の浜下りが行われる。錦町御宝殿の熊野神社と黒田の熊野神社など。

五 いわき地方の浜下りの神事の諸相

(1) 大國魂神社 いわき市平菅波

前述したとおり、浜下りの神事研究の原点的な存在である。筆者は昭和四六年、神社近くの根本英憲氏（昭和四六年調査時七五歳）と、祭場のいわき市豊間の遠藤菊次郎氏（昭和四六年調査時八二歳）

毎年四月八日、豊間の浜に下っていたが、現在は五月五日で、三年に一度ぐらい。お下りにならないと、漁がないとか悪病がはやるからといって、是非来てくれと豊間から迎いに来る。

浜に下らないときは、宵は神官と社総代が豊間にオコウリを取りに行った。大國魂神社の御神体は、かつて豊間の遠藤某が霊通川の川口で、恵比寿大黒みたいなものを拾い上げたが、ここに置いたのではもつたないというので、菅波に祀った。この神があがったという伝承に基づき、浜まで下るともいう。かつては、遠藤家が鍵持ちだったので、遠藤さんが来ないと、祭りにならなかった。浜までの道順は、かつて神が上つて来たという道を下り、霊通川のほとりを通って、豊間の宿（遠藤さん宅）前に神輿を安置し、潮垢離をとる。オコウリと言って、榊に潮水を浸して神輿にふりかける。

浜での神事が終わったら宿で休む。午後二時頃、豊間の青年たちは神輿を担いで波際に向かつて走っていき、海中に担ぎ入れ泳ぐ。昔は豊間の青年たちが途中まで神輿も迎えに来た。ここで神輿渡しがあるが、なかなか渡さなため、いつも大げんかになるという。

海岸では、区長をはじめ組長らが立ち会って、総代がお神酒をくみかわす。豊間の町内の人たちも、お神酒をあげたり、赤飯をあげたりする。このとき頭付の魚を必ずあげる。これをサカムカエと呼んでいる。

神輿が海岸よりあがると、豊間の町内をねり歩く。豊間の青年たちが浜の町境まで送ってきて、川境で菅波の青年たちに神輿をお返しする。帰りは、薄磯で各地より集った神輿と一緒にサカムカエの祝いをする。

沼ノ内を通り、藤間の北向き地蔵のところまできて休む。大越より新田目にきて休み、ここからは新田目の青年だけで集落をまわる。山崎では、この青年が神輿をかつぎ集落を一回りした後、また新田目の青年に神輿を渡す。新田目の青年は、甲塚古墳に登り、そこを三回まわって菅波の洞口に来る。ここで菅波の青年たちが待っていて神輿を受け取るが、この境目で一歩入

ったとか、入らないとかで揉めるという。

菅波の青年たちが集落を一巡りして、鳥居下で休む。鳥居下で新田目・山崎・菅波の青年たちが一緒になって階段を駆け上り、社殿を三回まわって、神輿を社殿に納める。

集落境とか道の四つ角などの神輿が休むところには、コガを置いて、そこへ筵を敷いて酒・魚などを用意して、神輿がくるのを待っている。ここで神官のお祓いの後、お神酒をいただく。サカムカエとよんでいる。

大國魂神社では、稚児舞や太々神楽などが神楽殿で舞われた。

豊間や菅波あたりでは、四月八日に山から榊やふじ・つつじ・山吹の花などを採ってきて、門口や軒下に飾ったりする。

(2) 諏訪神社 いわき市渡辺町中釜戸

筆者が諏訪神社の浜下りを調査した昭和四七年四月八日を最後に、現在まで一度も浜下りは行われていない。幸運にもその祭りの規模の大きさと、浜へ向かう道中での行事を、夢中でシャッターを切ったのが、懐かしい。祭りの様子は、祭場となるいわき市泉町下川の柴田勇氏（昭和四七年調査時六七歳）より詳細に聞くことができた。

諏訪の神様は、神笑の海岸で古口某が塩とりをしていた時、塩桶の中に入ってきたのが、諏訪の大神で白竜であった。それを竹筒に入れて家へもってきて、神棚の下に祀った。その晩夢の知らせで、俺は諏訪の大神だということで、拜んでもらったら、諏訪の大神で渚の音の聞こえないところに祀ってくれということで、中釜戸に祀られた。そして、七年に一度は大名行列で神笑へお下りになり、あがった神笑海岸で洗いごりして、救われた家を訪問して帰るといふ。

旧四月八日が祭礼で、中釜戸より下川まで奴子行道がつく。現在の大剣海岸で潮垢離の神事が行われる。奴子まつりとも言われる。上釜戸からは、子どもの殿様と家老が出て、それに奴子行道がつく。松小屋からは使者が出る。使者は古口家へ七度半の使いを立てる。この早馬が出てくれば、雨が降ろうと、風が吹こうと出発しなければならない。

神社の鳥居下で、まづ奴子の振り込みが行われる。続いて、ナガモチと呼ばれるものも披露される。途中数か所で奴子の振り込みが行われる。松小屋から田部に入る途中、「諏訪の道」と呼ばれる田んぼの畦道を通り、釜戸川の土堤に出て、田部に入る。最初のお休み所が、田部初田の永山宅である。永山家は田部の庄屋で、神様が上陸されてきたとき、休まれたという。永山

家で行列の一行は昼食をとる。

この日には、女の人は座敷に入ることができなかった。神官が清めてから入る。この時、床の間には赤芋とお神酒をあげておく。

田部から泉町へ下るが、途中の村境では、村の区長など役員が、紋付羽織姿で、行列を出迎える。泉町からは、かつて神を拾い上げたという古口家の人の案内で下る。泉町内では、奴子の振り込みが続く。

泉町の上遠野宅でお休みになる。上遠野宅を出ると、下川に向かう。途中、八ツ堀橋中央で、竜神の旗か下川の古口・川澄家へ手渡される。ここからは古口家の案内で、大剣海岸に向かう。潮垢離取りには、中釜戸の人たちだけがお供して行く。

祭場は、四方に青竹を立て、その中に砂で固めた祭壇を築き、その上に神輿を安置する。古口家の一人を案内として、神官が神輿より御神体を取り出し、抱きかかえ、一気に波際まで駆け寄り、潮水に浸して清める。オコリーを取るのには、真夜中の丑三つ時が本当だという。その時によっては、神官の姿が見えなくなるほど、海に入るといふ。

オコリーが終わって、古口家へ参る。古口家では、かつて神を祀ったという神棚の下のあったところに、テントを張って、お仮屋を作り、その前に神輿を安置する。ここで祭典を執行し、お神酒をいただく。お仮屋の前には、かがり火がたかれ、奴子の振り込みとナガモチが演じられる。かつては、神社に帰るころには夜が明けていたという。

沿道では、馬上の殿様や家老の子どもが眠ると、神がついたと手を合わせる老人もあつた。諏訪神社がお下りになるときは、各戸必ず幟を立てて、御神灯をあげた。門口には、榊や藤・山吹などの花を採ってきて、桶にさして飾る。桶の下には、鎮守の森の足を踏み入れない清い土を取ってきて敷く。山から花や土を取ってくる時、一緒に神を迎えるのだといい、サカムカエとも呼んでいる。

中釜戸の諏訪神社・下川の津神社・湯本の温泉神社の三つの神様が、神笑の海岸にあがった。ここで神様たちが笑って別れたため、神笑という地名になったという。神々が寄りついた時、諏訪の神は、俺は波の音の聞こえない山奥に住みたいと言い、津の神は俺は浜辺に住もうと言い、温泉の神は、俺は賑やかな所がよいというので、夫々の地に祀られるようになった。

(3) 鹿島神社 いわき市四倉町白岩

いわき地方の浜下りの神事で、四倉町にも多く分布し、数基の神輿が四倉

浜に下り、寄合祭を行う。四倉の諏訪神社・安房神社・出羽神社三社の神輿が四倉浜に下る。そこに周辺の玉山の十一神社・白岩の鹿島神社・原高野の大神宮の神輿も集結し、宴会等が行われる。鹿島神社の浜下りには、渡辺家の氏神も一緒に下り、潮垢離をとるといふ。また安産信仰とも関わり、赤子を伴って女性たちが浜に下るといふ習俗が遅くまであった。漂着審伝承を伴い、いわき地方の浜下りの特色を示す祭りでもある。女性にも信仰の厚かった浜下りの神事であり、男性・女性から調査できたことは、幸運であった。

いわき市四倉町白岩の吉田英武氏（昭和四六年調査時七四歳）いわき市四倉町白岩 吉田キン氏（昭和四六年調査時六七歳）

鹿島神社は、村の氏神で四倉浜の金洗の亀の子石にあがったという。毎年四月八日に亀の子石に潮垢離をとりにくる。

鹿島様は、安産の神として信仰されている。出産の時には、お守りやお札を受けてきて、産後、四月八日には赤子をおぶって、お礼返しに四倉の浜まで参詣に行った。

神輿は毎年下っていたが、下らない時は神輿は神社の前に出して、村中でお祭りをする。この時は、人足が出て潮垢離をとってくる。七日には、太夫様が来て神輿に御神体を移し申す。八日に四倉浜まで下る。この時、鹿島様の神輿に、渡辺氏の氏神（熊野）を一緒にして四倉浜まで下る。神輿と共に、個人宅の氏神が浜下りを行う例は、南相馬市鹿島区上柵窪の冠嶺神社（八竜神）にもある。八竜様のそばにある水神様（大谷家の氏神）、勝子明神（只野家の氏神）、熊野神社（新田家の氏神）が四月八日に南海老浜に下る。

道順は、毎年決まった道で、一担四倉の諏訪神社の境内で休む。諏訪神社の神輿を先頭に海岸に出る。四倉の諏訪神社の神輿は、江ノ網山に行くが、鹿島様は真つすぐ金洗に行く。亀の子石の上に神輿を安置し、櫛を潮水に浸し、神輿にふりかける。ここで神輿を前にして、昼食をとる。弁当は、毎年米を集めて赤飯を炊いて持つてくる。昔はよく、浜に行つて食事をしなければならぬと言われた。

金洗で神事を終えたら、中町下へ行き、諸所より集まった神々と一緒に拜む。ここで、神輿を直接海水に入れて清める。海よりあがったら、数基の神輿を注連縄が張られた祭場に、海の方に向けて安置する。ここで神官が祝詞を上げる。四倉の漁師たちの参拝も多く、お神酒や魚などがあげられる。

還幸も同じ道順で、五反田の四つ角で玉山の十市神社の神輿と分かれる。神社に戻つてから、センドー、センドーと三回言い、氏子の一人が幣束を持つて社殿の周りを駆け足で三三回まわる。ご神体は神輿に入れたままで、こ

の晩も宮まぶりをする。翌朝神官が御神体を本殿に移す。

(4) 大滝神社 双葉郡檜葉町上小墾

大滝神社は、その名の如く木戸川上流に雄滝・雌滝の二つの滝を祀った神社である。大滝神社は山宮的な存在で、里宮的な存在として木戸八幡神社があり、現在も毎年祭礼が行われている。

筆者は、昭和四六年当時の宮司宇佐神正典氏（八〇歳）より、詳細に祭礼の様子を聞くことができた。

大滝神社の祭神は、熊野系の四柱の神を祀り、那智権現の御神体を分けてもらった。大滝神社は木戸川溪谷にあり、里宮として木戸八幡神社がある。伝承によると、紀州から来た行者某が、熊野権現を背負って、東北にやってきた。

ある流れのほとりに、しばらく休んでいたところ、奇妙なものが流れてきた。この川上には霊場があるだろうと思ひ、木戸川を上ったが、わからなかった。途中、里宮山内某を案内にたどり着いたところが、現在の大滝神社のある所。

ここで長らく暮らしたが、食物がなく瓜を食べていた。それで瓜畑という地名になった。たまたま鳥がきて瓜を食い荒らすので、これを何とかしてもらいたいと、大滝の神に願うと、翌日鳥が死んでいった。そこが鳥塚という地名になった。現在でもその辺には、鳥がいなという。

祭りの前には、人足が出て大滝神社まで道普請をする。四月五日は、大滝神社まで二里の道のりを上つて、お迎えの祭りをする。鍵持ちは山内さんで、大滝神社がここへ来た時から、御扉開きの世話をしている。この日は、社殿にこもる。お宮の上にはお籠り堂もあって、みそぎ場で水垢離をとり、お神酒をいただきながら夜を明かす。四月六日は、大滝神社から、笈に移した御神体を奉じて、木戸川溪谷を下り、里宮の木戸八幡神社に向かう。

途中、女平・神が山・小山に御旅所が設けられる。木戸八幡には午後三時頃到着。着いたら、必ずアサツキをだした。

四月七日は、準備祭・おさかきで、青年たちが集つて、四尺ぐらいのぼんでんに、桜の花をふいたり、お神輿を清めたりする。この日の夕方から、社務所で煮炊きをする。オベツカ（御別火）には、氏子総代・鍵持ち・区長・青年ら、渡御祭の主役が参加する。

八日は、山田浜へのオサガリがある。神輿に御神体を移し、午前九時頃出発する。十時半頃山田岡で、出羽神社の神輿と出会い、出羽神社の神輿が先

になって浜まで下る。神輿の通るところには、門口に幟を立てたり、砂をまいたりする。

五ヶ所の御旅所では、近くの人たちが魚料理などをこしらえてきて、神輿をお迎えする。祭場には、柵にシデを付けたものを砂浜に立てる。氏子の人たちや参拝者は、笹の葉を潮水に浸して神輿にふりかける。これを潮垢離をとると言っている。

山田浜には津神社があつて、その前に筵を敷いて休む。

帰りは、前原を通り、天王様で休む。ここでは謡の最後に米・養蚕・たばこなどの相場を決める。ここより木戸の町へ入り、洞坂の御旅所に向かい神社に帰る。八幡神社に着いたら、御神体を笈づるに移し直会。今度は、うたいは青年の方からで、神官・猿田彦のほうへ盃をあげる。

九日は、お山へ帰る。お供は、青年の主役連中・氏子総代・区長・猿田彦・鍵持ちなど。

(5) 四十八社山神社 双葉郡富岡町下郡山

筆者は祭りを写真撮影することができ、宮古正宜宮司(昭和四六年調査時五七歳)からも詳しく神社の由来等を聞くことができた。特に、作占の行事など、いわき地方の浜下りの神事の特徴がみられる。

祭神は、大綿津見命を主人公として、他四七柱の神々を祀り、特に漁師の信仰が厚く、いわき地方や茨城県からも講中である。

毛萱の渡辺某が波際で、箱に入っている御神体を見つけ、自分の家に祀つたが、もつたいないというので殿通山に祀つた。殿通山は、海に沈んでしまったので、現在地に移し祀られるようになった。

昔の祭日は四月であつたが、後に九月十五日になり、現在は四月二三日である。毛萱の浜まで下る。

祭の前日、人足が出て浜までの掃除をする。かつては、神輿の通るところに海の砂を撒いたが、現在は行っていない。

神輿が浜まで下る途中、各戸ではお迎ええし、お神酒をいただく。ぼんでんの花を一本ずついただき、魔除けとする。浜に神輿が着くやいなや、ぼんでんに刺してきた花を下郡山と毛萱の村の人たちが奪い合う。これを花とりといい、この花を取ったものが、一年の作がよいという。この花をいただくゆき、自分の家の神棚にあげる。

神輿は、注連縄の付いた竹で四方をかためた祭場に安置される。神官の祝詞奏上後、神輿の下を子供をくぐらせると、丈夫な健康の子供になるとい

て、三回神輿の下を通して受け取る。これをするのは、村の総領孫という。四十八社山神社の浜下りは、潮垢離をとることなく、海浜に下って祭りを行うのみである。

六. わが国の民間信仰におけるいわき地方の浜下りの神事

次にいわき地方の浜下りの神事が、全国的にみられる浜下りの神事において、どのような位置にあり、海岸地域の民間信仰の中で、先学の民俗学研究を踏まえながら、若干の考察を加えたい。

考察の方法として、前述したいわき地方の浜下りの神事の特徴を構造的に分析する。分析にあたっては、先学の研究業績を踏襲する。特に柳田国男の研究に負うところが大きい。

(一) 御旅所としての祭場

「御旅所」について、柳田国男監修、民俗学研究所編『民俗学辞典』が簡潔に記載しており、いわき地方の浜下りの神事を例示している。浜下りの神事を考察する上で、示唆に富む記載であるので、長文となり恐縮であるが次に引用したい。

御旅所 神幸に当って仮に神霊を奉安する場所。神輿宿とも頓宮ともいうが、旅所の名も古くて百練抄平治元年(一一五九)・治承二年(一一八〇)の条にそれぞれ祇園旅所・稲荷旅所が見える。枕草子には平野神社にごく簡単な建物のみこしやどりのあつたことが見える。旅というのにはあまり相応せぬくらい、本社から、一・二軒ほどの地点に設けられるのが多く、現在村落によく見られるのは本社から集落を通りぬけた反対の端に設けられているものである。もつとも茨城・福島などの海岸地方には本社から十里くらいも隔たつて設けられるものがあつて、これは浜降りといつて寄合祭の形になつているのが多い。神幸は神のみゆきということであるが、このことはごく古く神が天より降臨したまうという觀念があつたのが変じて、神が一地点より他の地点へみゆきしたまう、または村々を巡幸したまうという觀念となつた。(後略)

本社から御旅所に神輿渡御する神幸よりも、御旅所から本社への還幸を重視する際も多く、御旅所こそむしろ、本来の祭場であつて、本社は本来、神庫としての機能しか持たなかつた場所という考え方もある。御旅所には常設の建物なく芝地などのまま聖地として画され、神輿渡御に際して仮説の握舎

が設けられる所も多い。福原敏男氏は御旅所を五つに分類し、その性格を位置付けている。

(一) 専用の建物を常設する、(二) 境内外の摂社を利用する、(三) 特定の神社(祭神の配偶神をまつるなど)を指定する、(四) 特定の氏子の家を選定する、(五) そのつど臨時の建物を設宮する、などのようになる。御旅所は、一ヶ所の場合もあれば、数ヶ所にわたる場合もある。御旅所では神輿が神座として扱われ、神霊はここにしばらく、滞留するものとされる。本社から御旅所への神幸道順は、通常一定しており、嚴重に守られている。いわき地方の浜下りの神事でも、中釜戸の諏訪神社の浜下りでは、「諏訪の道」と呼ばれる決まった道順であり、また特定の家宅を、御旅所として設けられている。いわき地方では、本社から祭場となる浜の御旅所までには、途中数ヶ所の御旅所が設けられる。相馬地方では、タテバと呼んでいる。主に村境や道路の四ツ角、神仏の堂前などがあてられる。特に浜と里との村境の建場は嚴重に扱われる。

御旅所にまつわる伝承と浜下りの神事の一例に相馬郡飯館村大倉の山津見神社があげられる。この祭りは筆者の出身地である南相馬市鹿島区の南海老浜に、毎年浜下りをするので、子供の頃から見てきた。タンタンボウズと呼ばれ、毎年四月二十日に笛と太鼓の音とともに神輿が旗を持った人たちと共に下ってきた。筆者は学生時代に母タケノ(昭和四六年調査時六三歳)より聞き書きを行った。母は昔話を一気に三〇話ほど語る、今思えばよき話者であった。大蔵での調査は、高野直喜氏(昭和四六年調査時七五歳)によるものである。特に、かつて山の神が祀られていたという土地や、そこから大倉まで移動した経緯や、道順と神が休まれた神社や家などの伝承があり、それらは御旅所にもなっている。御旅所と浜下りの神事について物語る伝承である。

毎年四月二〇日に神輿の行列は、南海老浜に下る。この日は、鹿島御子神社の祭礼でもある。太蔵の山の神様は女で、鹿島様は男で夫婦であるという。以前は、桑折氏の氏神として祀っていたが、後に村社となった。十六善神を祀るという。この神のいわれについては、浜の南海老で聞くのと大倉で聞くのとでは、その伝承を異にしている。

南海老では、大倉の神様は南海老の西畑亀夫さん宅の前にあったという。大倉には神様がなくて、大倉の某が、そこからうぶい(音読み)申して行った。盗んで行くのに、街道では見つかるから、右田(鹿島区)の田圃道を通り、台田中を通って行ったが、追われて土橋の下に隠れた。ここでも危なくなつて、昼

間は鹿島御子神社の下に隠れていた。夜になって、大倉へうぶい申して行って、その家の氏神とした。

そのうち大倉では、村中にはやり病が起こつて、その人まで病気になるってしまった。神下しをしてもらつたら、潮垢離をとれという神のお告げで、浜下りを行つて潮垢離をとるようになった。明治になって費用がかかるというので、一時浜下りを中止したが、村中に熱病が起きたので、神下しをしてもらつたら、お下りしないかと村を全滅にするというので、その年は時はずれに下つたという。もと神様があつたという所は、現在畑になっているが、鍬などを入れると、火花が出て掘り起こせないという。その場所は、もと西畑さんの屋敷の氏神だつたと言われる。

お下りには、何が何でも、ここを通らなければ神輿が重くて歩けないという。一方大倉の伝承によれば(相馬郡飯館村大倉高野真喜 昭和四六年調査時七五歳)、逆臣がお姫様を殺害するため、海を見せるからと言つて、鞍掛岩とかに行つて、だまして海へ突き落してしまった。姫様は死なずに南海老の浜へ上つた。味方の侍に助けられて、大倉まで逃げてきた。途中、大蛇などに襲われた。その時、姫は身ごもっていたが、だんだん山奥に入り、姫ヶ崎でお産をしたが、難産のため死んでしまった。それを狩人の桑折某が見つめて葬り、自分の家の氏神として祀つたという。

山津見神社の浜下りは、タンタンボウズと呼ばれる。太鼓の音からきたものか、その由来は不明である。毎年、かつて神が通つたという道を南海老浜までお下りになる。お供する人々は、村で輪番制をとり、二〇人くらいの氏子がお供をする。お神輿が神社を出る時、鉄砲を撃つて合図する。

真野川溪谷を立石を通り、上栃窪・白坂・角川原と、笛の音と、太鼓を鳴らしながら下る。白坂あたりは、姫様が泣き泣き通つたというので、笛も太鼓も鳴らさず静かに通る。

昼ごろ横手の桑折氏宅で休む。ここは逃げてくる時に、お休みになったところだという。午後一時ごろ鹿島御子神社を通つて、真野川の土橋下に行つて休む。旧加島中学校前は、大蛇に襲われた所だといひ、駆け足で通る。

右田の米山家宅では昔神様が草鞋を脱いだ所だといひ、必ず寄つて休んで水を飲む。ここに身を隠したともいい、お礼かたがた立ち寄るのだという。ここから右田と海老の字境の畦道を南海老の浜まで下る。南海老の西畑家の前を通り、南町を通つて祭場の台の上に向かう。

祭場は、玉石を敷いた砂浜の上に神輿を安置する。神輿を担いできた氏子

の一人が桶で潮水を汲んできて奉納する。お潮垢離をとつてくるまで、神官が太鼓を打ち鳴らし、祝詞を奏上している。帰る時、潮水を神輿を安置した場所に撒き清める。現在は、氏子の一人が桶を潮水に浸してきて、御神体と神輿を清める。帰りは、海老街道を上り、この日は、鹿島御子神社に泊まる。お神輿のお供には、必ず女の人がきやはんを巻き、わらじを履いて二、三人がお供してきたが、最近では来なくなった。

御旅所での祭りについて、柳田国男は『神道と民俗学』・『祭礼と世間』・『神社のこと』で、それぞれ次のように述べている。御旅所への移動を、「神幸」という表現をとっている。

(前略)とにかくに神を別な土地へ御迎へ申して祭る習はしは早くからあり、しかもさういふことの無い社も一方には多いので、最初も一つの方式しか祭には無かったのだとしますと、どちらが何故に改まり変つたのか、やはり答へなければならぬ大きな問題になります。

神の御旅といふやうな言葉は、たとへ京都にあらうとも或は後に考へ出したものかも知れません。従つて古くはどういふ名を以て呼んで居たらうかといふことが、人の此行事をどう見て居たかを窺ふたよりになるのですが、是も幾つかあつて変化の順序を見定めることが出来ません。御出といふ言葉は古い頃からのものださうですが(橘窓自語)、是はたゞ常の日の御宮から外へ、出でたまふといふことを示したものであります。神幸又はミユキといふのも、たゞその御出の最上級の敬語に過ぎません。(『神道と民俗学』より)

柳田は御旅所の觀念について『祭礼と世間』・『神社のこと』では次のように記述している。

又所謂御旅所なるものは、もと人間の設けた座敷では無くて、神が自ら選ばたまひし祭場である。故に神の御幸を又降臨とも、影向とも謂つたのである。(『祭礼と世間』より)

御旅所即ち臨時祭場の古くからあるものは、実際それが元来の神社の地であつて、今日の神社の方は却つて支度所のやうなものであつたのを、後々祭以外の日の用途が多くなつて、先づこの方の建築を立派にした為に、是が本宅の如く思はれるに至つたといふこと、次に祭場への神の来臨が、以前は夜間にごく少数の人の手を以て実現せられたのを、後々きらびやかな行粧を以て賑々しく行はれるやうになつたのは、中世の都市興隆に基く新しい文化であつて、其本質からいふと、是も一種の神態であり、即ち神態の場所の移動するものだったといふこと等で、この推測は多分當つて居ると思ふ。

(『神社のこと』より)

いわき地方の浜下りの神事は、神々が上陸したと伝えられる海岸や、神を拾いあげたと伝えられる家を祭場とする場合が多く、その場所や家は御旅所としての觀念が濃厚にみられる。また、浜までの道中には数ヶ所のオタバシヨが設けられ、そこで村人が神輿を待ち申し、お神酒や赤飯を神輿にお供えしたり、謡いなどを奉納する。これをサカムカエと呼んでいる。菅波の大國魂神社の浜下りには一八ヶ所の御旅所が設けられ、最大規模のものである。いわき市平下大越の白山神社の浜下りでは、岸前の御旅所でオサカムカエを行う。その場所には大きな旗を立て、その下には注連縄を張る。その中に神輿を安置する。ここにはオシヨウガツサマと呼ばれる松かざりを立てる。ここで村の安全のお札をいただき、近くに刺し立てておく。オサカムカエには、近所の人々が集まり、お神酒をいただく。

(2) 漂着神伝承と浜下りの神事

前述したように、いわき地方の浜下りの神事は、漂着神伝承を伴い、その上陸した浜に下る。また、大國魂神社のように、神が社殿に祀られるまで、「靈通川」を上つたという伝承や、中釜戸の諏訪神社のように神が上つた道、「諏訪の道」など、その伝承にちなんだ道を下る神々もある。

神出現の信仰のひとつとして、海岸地方の漂着神伝承は、沿岸の人々に真実の如く継承されてきており、それに因んで現在も浜下りの神事を行っている地方も多い。千葉県から宮城県の太平洋沿岸に顕著にみられる。堀一郎氏は、漂着神伝承と浜下りの神事について、明解な説を提示している。

神霊依帰の信仰を端的に表出した神事行事は、今日もなおきわめて多いと見られるが、なかんづく諸国に分布して類例を持っている「浜下り」・「御浜出」の神事は、神上陸の縁起と最も深い関係を持つものである。

(3) 四月八日と浜下りの神事

いわき地方の浜下りの神事が四月八日に、一斉に行われ、一定の浜に数基の神楽が下り、祭が行われることについて、柳田国男は『神道と民俗学』で早くから注目している。特に、四月八日の祭日に注意すべきと指摘している。いわき市四倉町玉山では、四月八日はヨウカサマといつて、家内中で浜に下るものであつた。特に初めての嫁は、必ず浜に下るものとしていた。体の清めになるといふ。年寄たちは、神輿が下らなくても、浜に下る人がいたとい

う。四月八日は神の日で、田に入らなかった。この日に榊を持ってきて、氏神様にあげる。

福島県の海岸一帯にも、祭に浜下りをなされる神社が幾つもあつて、是は大抵は祭日を四月八日として居るのは、注意すべきことであります。この祭の記事はかつて詳しく雑誌にも報告せられ、いつでも読んで見ることが出来ますが、やはり其浜のある村の神社だけで無く、中間幾つかの他の村を通過して、この水辺の祭場へ御出でになる古例なのであります。(中略)石城の方では同じ日の一つの祭場に、二社以上の祭りの行列が集まつて、所謂行逢祭の行はれるのが珍しいのであります。(『神道と民俗学』より)

「雑誌」とは、磐城民俗研究会による調査「磐城豊間村薄磯の漁村民俗資料」所収の『旅と伝説』十二卷十一号(昭和十四年発行)であろう。

(4) 四月八日の山宮と里宮との交替の祭り

柳田国男は、四月八日と十月八日という一年を両分して、神の交替する祭りが行われてきたことを『神道と民俗学』で指摘している。その一例に、宮城県蔵王町の荊田嶺神社と越後の米山薬師をあげている。

宮城県の荊田嶺神社に於ても、里宮が奥州往還の衝に立たせたまふを見れば、此方が先づ世に顕はれたまひ、従つて社地の莊嚴が進んだものと思はれますが、既に元文年間の封内風土記に依るも、一年を両分して十月の八日から四月の八日までが、里中の御止住期であり、その二度の御引移りには、おもとだしい神幸の行事があつた様であります。是は冬春が山上の雪氷に閉ざれて居る期間である上は、至つて自然なる考へ方と言はねばなりません。現に越後の米山の如きも、今は仏法の有名な霊地となりましたも、やはり山下の村々では、この四月と十月の八日の日を、特にお薬師さんの日として休み、餅を搗く者が多いさうであります。西頸城郡のある村に於ては、米山さんは四月の八日に山に登らつしやれるので、此日を御戸開きといひ、十月の八日には又麓へ下りて冬を送られるのだと謂つて、オカラコ即ち桑をはたいて新藁の苞に入れて供へ申すのは、明らかに農作に因んだ信仰が有るのであります。又他のある村では、お薬師さまは十月八日に、出雲へ薬を合せに出かけられ、四月八日に帰つて来られるのだとも謂つて居ります(同郡年中行事)。

四月八日と十月八日を祭りとするのに阿武隈山中に点在するハヤマがある。南相馬市鹿島区御山の羽山神社は、六十年に一度、浜下りを行つていたことが神楽の列帳からもうかがい知ることが出来る。安永年間から明治三十年に

も浜下りを行つて居る。四月八日に山から下り浜下りを行つて、子孫の農耕を見守り、十月八日に山に帰るともいわれる作神であり祖霊神でもある。すなわち浜下りの神事が農耕と祖霊信仰とも関わる事がうかがえる。

柳田国男編『歳時習俗語彙』には、ヤウカカウの記載に荊田嶺神社の山宮の下山式が記載されている。

磐城の刈田嶺神社などは、正・四・十月の三度の八日が祭で、八日講といふのは正月八日の献膳式のことを謂つて居るが、冬のか、りの十月八日には、下山式と称して奥の宮から神を迎へまつり、それから初夏の四月八日まで、里宮に神はいますとして居る(民俗叢話)。即ちこの日を以て再び嶺の祭場にお還りなるといふ信仰が爰にはあつたのである。四月八日を大祭とする諸国の御社には、武蔵の御嶽のやうに霊山の麓に祀るものが多い。

山宮と里宮の交替とみられるものに、筑波のお座替わりがある。藤田稔氏によると、「山宮にいる神と里宮にいる神が春秋にそれぞれ入れ替わる神事である。春になると、筑波山頂の親神(男女二神)が山麓の里宮に降り、里宮にいた子神たちが山頂に座を移す。秋になると親神はふたたび山頂に座替わりし、子神たちは里に移る。」という。

いわき地方の浜下りの神事が多く「神の日」の四月八日に行われることも、御旅所となる海岸の祭場に神幸する形態は、山宮から里宮(祭場の御旅所)への神霊の渡御ともみられる。山から里に下つた神々は、潮水で禊をして神の力を蘇生する観念があつたろう。中釜戸の諏訪神社や、楯葉町の大滝神社の祭礼にはその要素が濃厚にみられる。いわき市錦町御宝殿熊野神社の祭礼は、七月三十一日から八月一日に行われる。七年に一度はいわき市田人町黒田の熊野神社の浜下りが行われる。黒田の熊野神社は、山宮的な存在であり、御宝殿の熊野神社は里宮的な存在にあるといえる。御宝殿熊野神社祭礼の七月三十一日の午後には、勅使と呼ばれる男児が青年たちに伴われ、須賀海岸で潮垢離をとる。勅使は祭礼時、馬上で眠ると、参拝者たちは神が乗り移つたと、手を合わせ拝む。中釜戸諏訪神社の浜下りでも、殿様・家老の子どもが神輿と共に浜まで下る。やはり子どもが馬上で眠ると神が乗り移つたと拝む光景が見られた。勅使や殿様・家老たちは、神の依り代的存在であり、民俗学で言うヒトツモノといえよう。

(5) 浜下りの神事とサカムカエ

いわき地方の浜下りの神事で、最も盛んにサカムカエが行われたのは、菅波の大國魂神社をはじめ数社の神輿が集合する薄磯浜である。

それぞれの海で潮垢離をとった神輿は、薄磯の浜に集って海に面して並ぶ。伝馬船を台にして、到着順に並び、同じ順にサカムカエのお祝いをする。全部の神輿が並んだ様子は荘厳なものであったという。まず薄磯の区長とか社総代たちが発声して、高砂とか庭のいさごなどの、めでたい謡を三つ歌い、次にめでたを三つ歌うが、こちらで一つ歌えば、向こうの神輿のほうでも一つやるといふ具合に互いに歌う。それが済むと酒盛りになる。夕刻、神輿は帰路につくが、薄磯の青年たちは、村はずれまで見送ることをならわしとする。

サカムカエは、「坂迎え」と「境迎え」と表記されるが、いわき地方の浜下りの神事では、「酒迎え」と表記されるのみみられる。柳田国男監修、民俗研究所編『民俗学辞典』によると、「坂迎え」は、神仏詣りなどで遠方へ旅したものが帰ってくるのを、村境まで出迎えておこなう共同飲食のこと」とある。桜井徳太郎氏は、「サカムカエは結局、そのように神と同格の地位におかれた代参者が、再び人間に立ち返る行事であり場所であったということができよう」と的確な定義づけをされている。

いわき地方の浜下りの神事のサカムカエに似た行事に、相馬郡新地町福田の諏訪神社のオミコシムカエがある。諏訪神社の浜下りは、旧暦三月二三日であったが、昭和四十六年当時は、周辺の神社の祭礼が統一され、四月三日で、かつては埴浜まで下った。浜下りは諏訪神社・大神宮・八重垣神社の御神体を三基の神輿に遷し、猿田彦が先頭になって出発する。諏訪・大神宮・八重垣の順に沢口のウツシノミヤに向かう。沢口には諏訪神社の外末社の山の神がある。三基の神輿をウツシノミヤに安置した後、神官が山の神まで行って祝詞をあげる。

沢口のウツシノミヤは、赤砂で土壇を築き、神輿を安置する。これをオンコシカケバと呼んでいる。その前に筵を敷き、近くの人たちが、各自重箱に料理を詰めてきて、ここでお酒をいただきながら、昼食をする。これをオミコシムカエをいい、昔は皆で御神輿を迎えるものだと言われた。ここでも七福神神楽が奉納され、集った人たちからは、ハナがうたれる。かつては神輿が下ってから酒盛りが続いたという。沢口のウツシノミヤから作田のウツシノミヤに向かう。ウツシノミヤは、いわき地方のオタバシヨに相当するものである。

(6) 浜下りの神事と作占

浜下りの神事に来る年の作柄を占う、作占の行事を伴う神社がある。双葉

郡檜葉町上小埜の大滝神社や双葉郡富岡町下郡山の四十八社山神社などである。

いわき市錦町の御宝殿熊野神社の八月一日の祭礼には、浜下りは前日に神輿渡御と「勅使」と呼ばれる子どもが須賀浜に下り、潮垢離をとる。また兎と烏の絵を長い竹棹の先に付けた銚立の神事が毎年行われている。兎と烏の銚を青年たちが二手に別れて持ち、参道を一気に駆け抜け、社殿前に立てる。兎の銚が先に立ち勝てば、里側の農業が豊作となり、烏の銚が勝てば、海側の漁業が豊漁となるという。銚は祭礼の期間、立てられている。御宝殿熊野神社の祭礼には、兎と烏の絵を付けた銚を持って舞う、稚児田楽や、鹿踊りなど豊作を祈る民俗芸能も奉納される。

浜下りを行い、潮垢離を取り、神の新たな機能を蘇生した神に作柄を占うという観念があるものと推測される。

(7) 垂谷落しの神事

浜下りの神事に作占を伴うものとして、南相馬市小高区大井の益田嶺神社がある。同社は、往昔より甲子大国社と称し、大国主大神と少彦大神を祀る。旧暦四月八日が祭礼で、毎年オハマサガリといって、塚原の浜に神幸がある。還幸の途中垂谷にて、「垂谷落し」の神事がある。俗にタライオトシと言っている。たりやの訛語でタライとなったものである。また、ウマオロシとも呼ばれる。終戦後は、ほとんど行われなくなった。

四月八日の祭礼に際して、かつては一週間ほど前から、オベツカといって、祭に参加する人たちは、神社の社務所で朝夕の食事をとったが、後には祭の前日の夕食と当日の朝食とを、社務所に寄って煮炊きし、ただくだけになった。ここでは、煙草の火も遠慮してもらう。この期間は、各人が海に行つて潮垢離をとった。オベツカを行つて帰る途中、外の火のものを口にすると、必ずタライオトシに怪我をしたという。オベツカの生活は、祭に参加する人のみならず、タライオトシの馬も同様に行う。

八日は、本殿で祭事を執行了した後、神輿は神社を出発する。途中の休み所はなく、塚原の浜へ直行する。この時、タライオトシの馬は、尾に祈禱札を結んで、一緒に浜へ下る。祭場に到着すると、船を出し下しする時に使う枕木を積んで、砂を盛りあげた祭壇に神輿を安置する。

神輿付きの青年が、井に潮水を汲んできて、それを神に浸して神輿にふりかける。この神をシオカキといい、垂谷落しの祭場もこの神で清める。タライオトシの馬も青年たちに曳かれて海に入り、お潮垢離をとる。浜での祭事

を終えた後還幸となる。途中、塚原の諏訪神社で休み、神官が祝詞をあげて、海上安全を祈願する。これより垂谷の祭場に向かう。神輿が垂谷落しの祭場に到着すると、神輿を土盛りした祭壇に安置する。神官の祝詞奏上後、祭場をお祓いし、塩と洗米を撒いて清める。次にシオカキで大井の青年たちの約である白丁をお祓いする。

祭場は二〇間くらいの急な崖で、急なほどよいとされている。祭の三日前に人足が出て、祭場を掃除し、まわりに注連縄を張り巡らす。見物人は、この中に入ることができない。タライオトシは、神輿を担いできた大井の青年たちによって行われる。人数は乗り手が一人で右手を馬のたて髪に結わせ、左手は馬の尾に結んで乗る。馬の首を押さえる者が二人、その外、一脇・二脇・三脇・四脇とそれぞれ二名ずつ、八名が馬の脇につく。残りの青年たちは、馬の後部につかまり、馬の尻を押しつづす。馬は青年たちに押しつづされ、前足を突つ張り、後ろ足を曲げたまま、引きずり下ろされる。馬の前を青年の一人が洗米を撒き清めていく。

馬の首を押さえる者の頭上には、馬の足がくるようになるという。青年たちは、神に全てをかけて神事に参加するという。調子よく下りるのはそのまま下りるが、悪いのは途中でつかえ、足を伸ばして倒れてしまふ。こうなった場合、青年たちが苦勞して引き起こして落とす。タライオトシの馬は三頭で主に暴れ馬や人に噛みついたりする馬が選ばれる。これらの馬は氏子の人たちからの希望や乗り手がさがしてくる。どんな暴れ馬でも、タライオトシをすると、おとなしくなるという。

見物している人たちは、三頭の馬をそれぞれ早稲・中稲・晩稲(なかて)にみたて、その下り具合によって、稲の作柄を占う。早稲馬がうまく下れば、早稲がよく、晩稲馬が途中で潰れると、晩稲はよくないなどと占った。

タライオトシでは、不思議にも怪我をする者がなく、もし怪我をすると、必ず穢れがあったという。大井には、「タライオトシをさせられるから、婿に行かれない。」などと言われていたそうである。大井の古老の話によれば、この神事は、源平合戦の鶴越えの坂落しであるという人もある。

以上は、大井の門馬重亮氏（昭和四十六年調査時六五才）と、田代皎宮司（昭和四十六年調査時七五才）からの聞き書きを主であることを付記する。

なお、安政年間より相馬中村藩で編纂された『奥相志』には、垂谷落しの神事について、次のように記載されている。

四月八日祭礼、神輿を塚原の海浜に下す。還幸の時、祈願ある者三日潔斎、駿馬に跨り足谷山頂より駈下す。高山嶮嶺馬上の及ぶ所にあらず。故に割竹

を鳴らし以て逐下す。人馬分れて深谷に転じ、或は馬尾に縋りて下る者あり。或は環転して下る者あり。然れども人馬共に傷者あるなし。生駒、悪齧馬も尋常の馬となる。これを垂谷下の神事という。奇なるかな、衆人その神妙に感じざるはなし。古記に八日早朝これを行うという。

結びにかえて

以上、いわき地方の浜下りの神事を中心に、その特色をあげて若干の分析と考察を行ってきた。その結論として、御旅所としての祭場となる海浜への神幸と位置付けられよう。この神事形態は、福島県浜通り北部の相馬地方にも言えるが、いわき地方は、特に濃厚に神事形態がみられる。オタビシヨという民俗語彙は、現在の浜下りの神事にも継承されている。祭場となる御旅所には、数基の神輿が集合し、寄合祭が行われ、そこではサカムカエと呼び、謡や酒盛りも行われる。

祭日は四月八日で、一定の浜に下る。四月八日は「神の日」とも呼ばれ、間に山から採ってきた藤や山吹・つつじなどの花を供え、浜下りをする神輿をお迎えする。これもサカムカエと呼んでいる。

祭場となる浜には、かつて神が上陸したという、漂着神伝承を伴う神々が多く、その伝承に因んで、浜下りを行う神々が多い。福島県浜通り地方の浜下りの神事に共通した、特色と言える。

個人の氏神の浜下りもみられる。これは相馬地方にもあり、浜下りの神事に祖霊神の浜下りが関連付けられる一要素でもある。

浜下りを行う神々には、山宮的に山間の地と里宮的に近い場所に社殿があり、山宮の神輿は数年に一度の大祭に浜下りを行うという場合もある。いわき地方の浜下りの神事には、山宮と里宮の神事の形態をみることもできる。いわき市錦町の御宝殿熊野神社と田人町黒田の熊野神社はその一例である。渡辺町中釜戸の諏訪神社なども、現在の社殿のある地が山宮であり、祭場となる下川の浜は、御旅所であり、里宮的な存在にあるといえる。この信仰形態は、楡葉町上小墾の大滝神社の浜下りの他、相馬地方でも飯館村大倉の山津見神社の浜下りなどにもみられる。

浜下りの神事には、稲作のできぐあいをお占う、作占の神事を伴う例もある。四月八日という農耕の始まる節に、山から里へ下り、潮水の浄化により、神の機能を蘇生し、作柄を神に問うという観念を垣間見ることができる。福島県浜通り地方の浜下りの神事には、沿岸地方の民間信仰を考える上で、重要

な信仰要素を含んでいることを指摘できる。柳田国男も、『神道と民俗学』などで注目しているところである。

令和四年、千葉県立中央博物館では企画展「おはまおりく海へ向かう神々の祭りく」を開催している。同館では、千葉県内の浜下りの神事の総合調査を行っており、その一環として展示を行っている。浜下りの神事が全国的規模で調査研究される時代にあると言える。このような研究動向の中、拙稿が、福島県の浜下りの神事の資料提供となれば幸甚である。

拙稿を執筆するにあたり、次の多くの方々から資料提供と御教導いただいたことに敬意を表したい。岩崎真幸・石井聖子・榎美香・大里正樹・大山孝正・神野善治・亀倉加久子・二本松文雄・松田香代子・山崎祐子・山名隆弘（敬称略・五十音順）

註

- (1) 福島県立博物館編集・発行 『福島県における浜下りの研究』 福島県立博物館 平成九年
- (2) 佐々木長生 「浜下りの神事の分布と考察 福島県相馬地方・双葉地方・いわき地方」岩崎敏夫編『東北民俗資料集』（四）所収 万葉堂 昭和五〇年
- (3) 佐々木長生 「四月八日と浜下りー相馬地方の八竜神の浜下りを中心にー」 日本風俗史学会東北・北海道支部編集・発行『日本風俗史学会東北・北海道支部研究紀要』第四号 令和四年
- (4) 岩崎敏夫著 『日本の年中行事ー磐城編ー』 現代思想社 昭和一八年
- (5) 大須賀履 「磐城誌料歳時民俗記」『日本庶民生活史料集成 第九巻 風俗』所収 三一書房 昭和四四年
- (6) 磐城民俗研究会 「磐城豊間村薄磯の漁村民俗資料」『旅と伝説』第十一巻四号 所収 三元社 昭和十四年
- (7) 柳田国男 『神道と民俗学』（昭和十八年四月、明生書店）『定本柳田國男集（新装版）』第十巻 所収 筑摩書房 昭和四四年
- (8) 柳田国男監修・民俗学研究所編 『民俗学辞典』 東京堂出版 昭和二六年
- (9) 註(2)
- (10) 註(2)
- (11) 註(2)
- (12) 註(2)

- (13) 註(2)
- (14) 註(10)
- (15) 福原敏男 「御旅所」『日本民俗大辞典』上 吉川弘文館 平成一二年
- (16) 註(2)
- (17) 註(2)
- (18) 堀一郎 「神幸浜下の神事」『わが国民間信仰史の研究（一）』 東京創元社 昭和三九年
- (19) 註(7)
- (20) 柳田国男編 『歳時習俗語彙』（昭和一四年初版発行） 復刻版 国書刊行会 昭和五〇年
- (21) 藤田稔 『日本の民俗 8 茨城』 第一法規 昭和四八年
- (22) 註(8)
- (23) 桜井徳太郎 『日本民間信仰論』増補版 弘文堂 昭和四五年
- (24) 註(2)
- (25) 註(2)

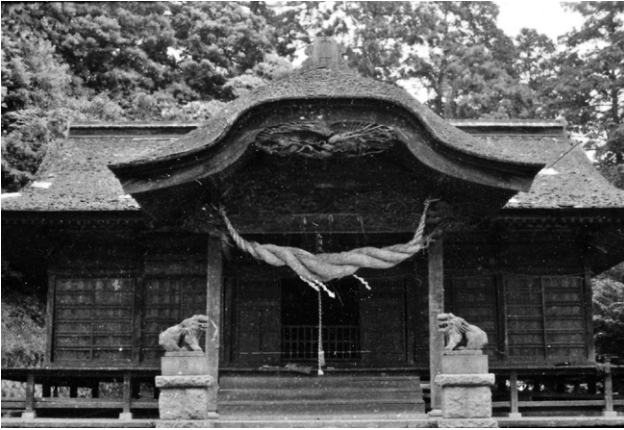


写真1 大國魂神社 社殿 いわき市平菅波 昭和47年4月15日



写真2 大國魂神社の遠景 荒田目より望む いわき市平菅波 昭和47年4月15日



写真3 甲塚古墳（古墳上の松の木はその後枯死 大國魂神社の浜下りでの御旅所の一つ 神輿を担ぎ登りサカムカエが行われる）いわき市平荒田目 昭和47年4月15日



写真4 大國魂神社 サカムカエ 山崎祐子氏撮影（平成25年5月）



写真5 大國魂神社浜下り 海水に入る神輿 山崎祐子氏撮影（平成25年5月）



写真6 大國魂神社 甲塚へ上りサカムカエを行う 山崎祐子氏撮影（平成25年5月）



写真7 薄井神社 (2011年3月11日の東日本大震災によって流失) いわき市平薄磯 昭和47年4月15日撮影



写真8 中釜戸の浜下り 門口に供えられたサカムカエの花 いわき市泉町下川



写真9 薄磯のさいの河原
いわき市平薄磯 昭和46年7月



写真10 諏訪神社の浜下りと奴子行道 村境の御旅所で神輿を迎える氏子たち いわき市渡辺町中釜戸 昭和47年4月8日



写真11 中釜戸諏訪神社 社殿 いわき市渡辺町中釜戸
昭和47年4月8日



写真12 諏訪神社を出発する神輿と奴子行道 いわき市渡辺町中釜戸 昭和47年4月8日



写真13 諏訪神社の浜下りと奴子行道 馬上にまたがる「殿様」役の子どもと、もう一人「家老」役の子どもも随行 下川の祭場まで下る いわき市渡辺町中釜戸 昭和47年4月8日



写真14 諏訪神社の浜下りと奴子行道 馬上で眠る「殿様」 眠ると神が乗り移ったとして沿道の参拝者は手を合わせて拝む いわき市渡辺町中釜戸 昭和47年4月8日



写真15 諏訪神社の浜下りと奴子行道 御旅所の神輿を安置する砂の壇 いわき市泉町下川 昭和47年4月8日



写真16 諏訪神社の浜下りと奴子行道 御旅所では砂で築かれた壇の上に安置された神輿と神主・氏子たちによるサカムカエが行われる いわき市泉町下川 昭和47年4月8日



写真17 奴子行道の様子 いわき市渡辺町中釜戸 昭和47年4月8日



写真18 諏訪神社の浜下りと奴子行道 諏訪の道を下川の浜に下る諏訪神社の神輿 いわき市渡辺町中釜戸 昭和47年4月8日



写真19 中釜戸諏訪神社の浜下り 下川古口家（御旅所）に安置された神輿（いわき市泉町下川）昭和47年4月



写真20 村境で神輿を迎える氏子たち いわき市渡辺町中釜戸 諏訪神社の浜下り 昭和47年4月8日



写真21 神輿にお供する「殿様」 いわき市渡辺町中釜戸 諏訪神社の浜下り 昭和47年4月8日



写真22 神輿を浜まで案内する古口家（かつて神を拾い上げたと伝えられる） いわき市渡辺町中釜戸 諏訪神社の浜下り 昭和47年4月8日



写真23 御神体の潮垢離 かつて神が上陸したと伝えられる神笑の海岸で神主が御神体を潮水で清める いわき市小名浜神笑海岸



写真24 木戸川の雄滝と女滝 双葉郡楡葉町上小墻 平成21年 二本松文雄氏撮影



写真25 大滝神社の籠り堂 双葉郡檜葉町上小埜 平成21年 二本松文雄氏撮影



写真26 大滝神社 双葉郡檜葉町上小埜 平成21年 二本松文雄氏撮影



写真27 大滝神社の浜下り 御神体を笈で背負い、御旅所へ向かう 双葉郡檜葉町上小埜 平成21年4月



写真28 大滝神社の浜下り 津神社の御旅所 双葉郡檜葉町 平成21年 二本松文雄氏撮影



写真29 大滝神社の浜下り 御旅所



写真30 愛宕花園神社の浜下り 御旅所に到着した神輿 いわき市平中神谷 愛宕花園神社 昭和47年4月15日



写真31 御旅所に御札を飾る氏子 いわき市平中神谷 愛宕花園神社の浜下り 昭和47年4月15日



写真32 御旅所に飾られた注連縄や御札など いわき市平中神谷 愛宕花園神社の浜下り 昭和47年4月15日



写真33 愛宕・花園神社の浜下り 新舞子浜の御旅所でのサカムカエ 御神酒をいただいた後、謡を歌い、酒盛り、食事となる



写真34 四倉浜に到着した数基の神輿 サカムカエが行われる いわき市四倉町 諏訪神社・安房神社・出羽神社



写真35 八日塔 いわき市四倉町 昭和46年5月



写真36 四十八社山神社の浜下り 神輿の下を子どもをくぐらせ、成長を祈願する 双葉郡富岡町下郡山毛萱浜



写真37 四十八社山神社の浜下り ぼんでんの幣を奪い合い ぼんでんの軸 双葉郡富岡町下郡山毛萱浜 昭和46年4月



写真38 四十八社山神社の浜下り ぼんでんの幣を奪い合い ぼんでんの軸 双葉郡富岡町下郡山毛萱浜 昭和46年4月



写真39 四十八社山神社の浜下り 御神体を清める 双葉郡富岡町下郡山 毛萱浜 昭和46年4月



写真40 四十八社山神社の浜下り 海浜を誂い清める 双葉郡富岡町下郡山毛萱浜 昭和46年4月



写真41 四十八社山神社の浜下り 祭場での神事 富岡町下郡山 昭和46年4月15日



写真42 四十八社山神社の浜下り 浜に到着した神輿に神主の祈禱が行われる 富岡町下郡山 昭和46年4月15日



写真43 立てられた兎と鳥の御銚 いわき市錦町御宝殿熊野神社 昭和47年8月1日



写真44 御宝殿熊野神社の勅使の浜下り 勅使の子どもが祭の前日、須賀の浜に下り、潮垢離をとる 浜に向かう勅使 いわき市錦町御宝殿 昭和46年7月31日



写真45 御宝殿熊野神社祭礼 勅使の潮垢離 いわき市錦町須賀浜 昭和46年7月31日



写真46 御宝殿熊野神社の御銚立の神事 兎と鳥の絵を付けた銚を競い立て里と海の作を占う いわき市錦町御宝殿熊野神社 昭和47年8月1日



写真47 大倉山津見神社の浜下り 祭場である南海老の浜に神輿が到着



写真48 大倉山津見神社の浜下り 南海老の浜での神事 潮水に浸した櫛で神輿を清める 南相馬市鹿島区南海老 昭和46年4月



写真49 養蚕豊作祈願の御札と幣束 浜下りの沿道の養蚕農家に配られる(蚕室に奉納する) 相馬郡飯館村大倉山津見神社の浜下り 南相馬市鹿島区南海老 昭和46年4月20日



写真50 浜下りの祭場の竹矢来 南相馬市鹿島区烏崎浜日吉神社の浜下りの神事 平成16年4月



写真51 日吉神社の浜下り 潮水を汲み神輿に供える烏崎の区長 平成16年4月



写真52 日吉神社の浜下り 堤下の建場 南相馬市鹿島区大内 平成16年4月



写真53 日吉神社の浜下り 浜と里の村境堤下の建場の光景 参列者一名一名を列帳で確認 南相馬市鹿島区大内 平成16年



写真54 津神社 3・11の大津波で流失 南相馬市鹿島区烏崎 平成16年4月



写真55 津神社の浜下り 蕪引き 南相馬市鹿島区烏崎
2009年4月



写真56 津神社の浜下り 鯨引き 南相馬市鹿島区烏崎
2009年4月 二本松文雄氏撮影

蕪（里側の村）と鯨（海側の村）で引きあい、豊作や豊漁を祈る



写真57 虚空蔵様の浜下り 海岸に到着 南相馬市鹿島区
南海老 昭和44年3月28日



写真58 海老の虚空蔵尊の浜下り 建場に設けられた土壇
の神輿台 南相馬市鹿島区南海老



写真59 建場の御輿台に安置された虚空蔵尊の御輿 海老
の虚空蔵の浜下り 南相馬市鹿島区北海老 昭和46年3月
28日



写真60 潮垢離取り 海老の虚空蔵の浜下り 南海老の区
長が波三つを越えて潮水を汲み虚空蔵尊に供える 南相馬
市鹿島区南海老浜 昭和46年3月28日



写真61 建場（北海老と南海老の村境）村境には「右海老浜 左鹿島町」の石碑がある 虚空蔵の浜下り 昭和46年3月28日



写真62 小泉川での潮垢離 かつては埴浜まで下り潮垢離をとった 相馬郡新地町福田 諏訪神社 昭和46年4月15日



写真63 潮垢離を取る小泉川に到着した神輿で神事を行う 神主と氏子たち 昭和46年4月15日



写真64 御旅所の神輿安置の土壇 相馬郡新地町福田 諏訪神社 昭和46年4月15日



写真65 神輿前で七福神神楽の舞を奉納 相馬郡新地町福田 諏訪神社 昭和46年4月15日

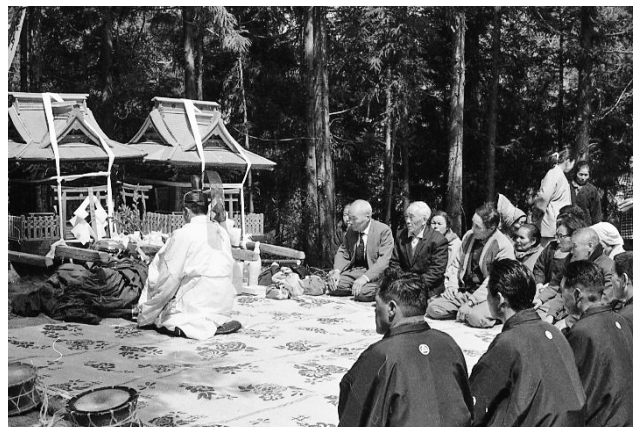


写真66 神輿迎え 土壇に安置された三基の神輿前で神輿迎いの神事が行われる 相馬郡新地町福田 諏訪神社 昭和46年4月15日